



朗読詩集：詩の花籠
Raccolta di poesie tradotte:
Il cesto di fiori della poesia



Raccolta di poesie tradotte:
Il cesto di fiori della poesia
Mariko Sumikura

朗読詩集

詩の花籠

すみくらまりこ

Private edition

目次

中島夜汽車（日本）

パウル・ツェラン（ルーマニア）

ミロシュ・ツルニャンスキー（セルビア）

マリウス・チェラル（ルーマニア）

フェルナンド・ペソス（ポルトガル）

セスト・パルス（ルーマニア）

中島夜汽車（日本）

中島^{や き しゃ}夜汽車（日本）

ひとひらの

重き狂気の

さくらかな

寒鷺（寒のサギ）

浅川マキと

堕ちて来よ

花冷えの
泉鏡花が
墨を磨(す)る

蝉殻を
踏めば怖ろし
うすき聲

吹雪てふ
鷹老いて神
上がりましぬ

ミロシュ・ツルニャンスキー（セルビア）

ミロシュ・ツルニャンスキー（セルビア）

スマトラ

我らにもう憂いはない
無心に軽くやわらかく
思うはただ 雪に覆われた
ウラルの静けさ

悲しむな あの夜失せた
淡く恋しいおもかげは
はるか彼方で一本の
小流れと化した

ミロシュ・ツルニャンスキー（セルビア）

異邦の朝な朝な
愛のひとつひとつが
たましいを包んでいく
故郷のさくらんぼのように

赤い珊瑚をちらつかせた
青い海の果てしない
平穏をもって
夜中起きてやさしく

触れよう 遠い山に
凍りついた嶺に
ただ微笑んで 弓張月の
いるにまかせて

パウル・ツェラン（ルーマニア）

パウル・ツェラン（ルーマニア）

「きみから俺までの年月」

俺が泣くと、きみの髪がまた乱れる。

水色の瞳で、

きみは俺たちの愛のテーブルを覆う。

夏と秋の間のベッド。

俺でも、きみでも、他の誰でもない

誰かが絞ったワインを、俺たちは飲む。

空虚で極端な何かを、俺たちは一口ずつ。

俺たちは深海の鏡で俺たち自身を見つめ、

さっさと俺たち自身に食べ物を供する。

パウル・ツェラン（ルーマニア）

夜は夜であり、

それは朝から始まり、

俺をきみといっしょに横たわせる。

マリウス・チェラル (ルーマニア)

孤独に殺される
海岸で
霧に吹かれた風が石を傷つける
その家の物干し竿に
老人の体のような乾いた柵で
開かれた門から過去へ
誰にも公開しない

思い出
鳥の飛行ベールを身に着けている
アノダインは太陽の下で暮らしている
進路を決める瞬間を待っている

思い出が敷き詰められた道で
誰もいない時代から
俺はきみの指に目に見えないものを描きます

マリウス・チェラル (ルーマニア)

指は色のダンスを模倣する
空はきみの目の色に染まる
そして俺
俺はまだきみの腕を掴んで息を止めている
きみ
新たな不在の中にある孤独の汚点

子供の頃の小麦の香りのパンのように
橋の下の公園のベンチで
目を大きく閉じて
俺は記憶の鍵で遊ぶ
きみの温もりが寄り添うのを待っている

マリウス・チェラル (ルーマニア)

俺の心の手のひらの間
歪んだ形の思考が俺の上を滑り落ちる
今
きみは遠ざかる気配なのだ
熱の翼に運ばれて漂っていく
リラックスした歩き方で休憩を

夏

木の葉の上で揺れる
波に揺られる女のように
大モスクの塔から羽ばたく
空の間の時間によって忘れられたアハウドリの
翼

マリウス・チェラル (ルーマニア)

マリウス・チェラル（ルーマニア）

アブドウル・メジドの息
ペトロとパウロ教会の鐘
薄い雲に向かって流れる
迷い込んだ水タバコの煙のように
俺のような
この瞬間の翼の根元に
愛の羽根と永遠の笑顔で

乞食の片隅

瞬間をお金で数えよう。
これが今の人生の意味だ。
その時間に対して支払うためにいくら稼いだ？
お前が押すと降りてくる
腐った息で

前に
痛みもあった
そして忘れられた後悔
女の子の服を着て
そして憎しみ
カラフルは軽蔑的な女を笑った

前に
今
瞬間はお金に変わる
瞬間の価値は「その程度」か「その程度ではない」か
愛は待つことを嫌う -
意味のない辞書の言葉
無関係
支払う人のためのもの
自分が優れていると思わせるために

マリウス・チェラル (ルーマニア)

他にも何かあるかもしれない

家路の終わりに

毎日

－ あと何ぼあるか誰にも分からない －

マリウス・チェラル（ルーマニア）

死が彼を待っている
女の体に身を包んだ
美しい
夢を見た時に忘れてしまったように
女のドレス
それは特別な布で作られている
片側（内側からのもの）
家族アルバムの写真だ
時間をお金で測る以前の幼少時代から
みんなの目に面している側
それは笑顔の断片から織り成される
紙幣と
ある日
立ち止まって女の腕の中に落ちていく
しかし、

マリウス・チェラル (ルーマニア)

後で

お金を数えた

女がどれくらい生きたかを知るために

フォトアルバム

写真に閉じ込められた世界

役者の顔だけが映し出される劇場だ。

奇妙な役割

死は生と同じ

スポットライトは貧弱な装飾だ。

笑顔

シンプルなユニフォーム

視聴者

年々無関心に

彼らはそれを拒否する

思い出の墓地で

フェルナンド・ペソア（ポルトガル）

フェルナンド・ペソア（ポルトガル）

前兆

愛は、その姿を現す時、どのように現せばいいのか分からない。

愛は彼女をどう見つめるかは知っているが、どう語りかけるべきかを知らない。

自分の気持ちを伝えたいと思っても、何を言えばいいのか分からない。彼は語る——まるで嘘をついているようだ… 彼は沈黙している——まるで忘れていているようだ…

フェルナンド・ペソア（ポルトガル）

ああ、もし彼女が察することができたら、もし
彼女が視線を聞き取ることができたなら、そし
てもし視線だけで

彼女が愛されていると知ることができたら！

しかし、多くを感じている者は沈黙する。どれ
ほど感じているかを語りたい者は、魂も言葉も
なく、完全に一人ぼっちになってしまう！

しかし、もしこれが俺が彼女に敢えて伝えたく
ないことを 伝えることができるなら、俺はも
う彼女に話しかける必要はないだろう。

フェルナンド・ペソア（ポルトガル）

なぜなら、俺はすでに彼女に語りかけているからだ…

☆

愛とは仲間だ。

もう一人で街を歩く術を知らない。

一人では歩けないからだ。

目に見える思考は、俺をより速く歩かせ、より少なく見させる。同時に、歩き、すべてを見る喜びを与えてくれる。

彼女がいないことさえも、俺の中にずっと残る。彼女を愛するあまり、どれほど恋しいのかさえ分からない。

彼女に会えない時は、彼女を想像して、背の高い木々のように強くなる。

フェルナンド・ペソア（ポルトガル）

でも、彼女を見ると、俺は震える。彼女がいない時、俺の感情がどうなるのか、俺には分からない。の力はすべて消え去り、すべての現実が、顔を真ん中に向けられたひまわりのように俺を見つめている。

☆時々悲しい夢

俺の憧れの地は、遥か彼方にある。そこでは、幸せとは幸せであることそのものでしかない。人は生まれたままの姿で、望むことも知ることもなく生きる。

その生きているという幻想の中で、時間は過ぎ去る ことを感じることなく

フェルナンド・ペソア（ポルトガル）

死に、そしてまた生まれる。感情も欲望も、その地から追い払われている。俺の遥かな放浪が彷徨 うその地では、愛は死ではない。人は夢を見ることも、生きることもない。それは終わりのない幼年時代だ。まるで再び生きているかのように、そのありえない庭で このように生きるのは、あまりにも甘美だ。

フェルナンド・ペソア（ポルトガル）

「俺を傷つけているのは」

俺を傷つけるのは、
俺の心の中にあるものではなく、
決して存在しない美しいものなのだ。
それらは形のないものであり、
痛みもなく、
それを知ること、
愛を夢見ることもできないまま
過ぎ去る。

まるで悲しみが
木で、一枚一枚
葉が
道と霧の間に落ちていくようだった。

フェルナンド・ペソア（ポルトガル）

誰がもっと夢を見るだろうか？
どちらがより多くの夢を見るか、
教えてほしい -

合意された世界を見る者か、
それとも夢の中で迷っている者だろうか？
何が真実か？そして、
現実が存在する嘘か、
それとも夢の中にある嘘か？
真実から遠いのは誰か？
影の中の真実を見るのは誰か、
それとも照らされた夢を見るのは誰か？
夕食の相手として良い人、それともこの人？
パーティーで疎外感を感じる人？
若い頃、俺はよく自分に言い聞かせていた
若い頃、俺は自分にこう言っていた。

フェルナンド・ペソア（ポルトガル）

「何日も何日も過ぎていくのに、
何も達成も計画も立てられない！」
年を重ねるにつれ、同じように苛立ちながらこ
う言う。

「何日も何日も過ぎていくのに、
何も成し遂げられず、何も計画も立てられな
い！」

だから当然、年を重ねるにつれ、俺は同じ声と
意味を込めてこう言うだろう。「いつか、何も
言わなくなる日が来るだろう。何者でもなかつ
たし、今も何者でもない者は、何も言わないだ
ろう。」

愛が明らかにするとき
愛は、その姿を現す時、
どう現せばいいのか分からない。

フェルナンド・ペソア（ポルトガル）

彼女をよく見つめる術は知っているが、どう語りかけるべきかを知らない。

自分の気持ちを伝えたいのに、
何を言えばいいのか分からない。

話すけれど、嘘をついているようで…

沈黙するけれど、忘れているようで…

ああ、でももし彼女が押し量ってくれれば、
もし彼女が目で分かってくれれば、そして彼女
が愛していると分かるのに

一目見るだけで十分であつたら！

しかし、多くを感じる者は沈黙したままであり、
感じたことを表現したい者は

魂も言葉もなく、完全に孤独のままである。

でも、もしこれが、俺が言えないことを伝える
ことができれば、俺はもう話しかける必要がな
くなるだろう。

フェルナンド・ペソア（ポルトガル）

なぜなら、俺は話しかけているからだ...

☆

きみの名前は知らない

きみの名前も知らない。

横顔も覚えていない。

きみの言葉も忘れてしまった。

霧のかかった 12 月の朝、

きみを見つけて、そして失った。

夢か、それとも記憶か？

わからない。朝だった。

霧がそこにあったものと俺が考えていたものを

隠していた。まるで

偽りの最後の避難所のように、

俺がどこにもいなかった。

冗長で完全な夢。

フェルナンド・ペソア（ポルトガル）

しかし、もしきみの手が鍵の間をさまよったと
したら、
このように、きみの存在を剥ぎ取られて、俺は、
おそらく、俺が出会えなかったものの中に、俺
が見つけられないものを見つけることができる
だろうと思う。

何も考えていない

俺は何も考えていない。

そして、この中心的なものは、逆に何もないこ
とだが、俺にとっては、昼間の暑い夏に比べれ
ば涼しい

夜の空気と同じくらい歓迎されるのだ。

よかった、何も考えていないよ！

フェルナンド・ペソア（ポルトガル）

何も考えないということは、魂が完全に満たされているということ。何も考えないということは、人生の盛衰を身近に体験するということ…何も考えていない。まるでひどく体を傾けてしまったかのような。背中や脇腹に痛みを感じ、魂に苦い味がする。なぜなら、結局のところ、俺は何も考えていないからだ。全く何も、全く何も…

☆

まるで香水の匂いだ
まるで花の香りだ
俺を起こしてくれるかのように聞こえる…
それは音楽だ —影響とフィクションの
花壇だ。
触れることのできない記憶、

フェルナンド・ペソア（ポルトガル）

誰の笑顔もない、希望さえ持たない
その希望で…

☆

感じる事が自分を知る事でないなら、何が問題
なのだ？

俺は聞き、微笑みを感じる。

俺の中ではそれは何も望んでいない。

俺の視線はひまわりのように澄んでいる

道を歩くとき、

左右に目を配り、時には後ろを振り返る癖があ
る…

フェルナンド・ペソア（ポルトガル）

そして、俺が常に目にするものは、これまで見たことのない何かであり、そして、それをどのように捉えるかを俺はよく知っている。生まれた瞬間に、自分が本当に生まれたのだと実感した子供が抱くであろう、本質的な驚きを、俺はどのように経験するかを知っている…俺は、世界の永遠の新しさによって、常に自分が生まれているのを感じる…

☆

ヒナギクのように世界を信じている。

なぜなら、世界を見ているからだ。しかし、世界について考えることはない。

考えるということは、理解できないということだからだ。

フェルナンド・ペソア（ポルトガル）

世界は、俺たちが考えるために創造されたのではなく（考えることは目の病だ）、俺たちが世界を見て、それと調和するために創造されたのだ。

俺には哲学はない。ただ感覚があるただ。

俺が自然について語る時、それはそれが何であるかを知っているからではなく、愛しているからだ。そして、俺が自然を愛する理由はただ一つ。なぜなら、愛する者は自分が何を愛しているのか、なぜ愛しているのか、そして愛するとはどういうことなのかを決して知らないからだ…

フェルナンド・ペソア（ポルトガル）

愛することは永遠の無垢であり、
唯一の無垢とは考えないことです…

フェルナンド・ペソア（ポルトガル）

☆

コンテンツ革命

セネカの言葉は、俺たちにもっと自分自身を信じるように促している

セネカの言葉とされるこの言葉は、成功の本質と人間の運命を支配する力学について、最も鋭い考察の一つを凝縮してる。一見シンプルな言葉だが、哲学から倫理、さらには心理学や自己実現の分野に至るまで、様々な解釈が可能です。詳しく見ていこう。

「運は存在しない。才能と機会が出会う瞬間がある。」

ローマ人とセネカにおける「運」の概念

ローマ文化において、「運命」（*vox media*）は単なる口語ではなく、気まぐれで予測不可能な女神、つまり個人の功績や努力とは無関係に成功か悲劇をもたらす女神を象徴していた。このイメージは、いかに慰めとなるものであったとしても、しばしば個人から自らの運命に対する責任を剥奪し、人生という舞台における受動的な役割へと追いやってしまうことがあった。

しかし、セネカはこの伝統を破る。ストア派の哲学者として、彼は美德、自制心、そして理性の重要性を強調した。ストア派にとって、自身の態度と行動を制御することは、存在の不確実性に対処する上で不可欠なのだ。

フェルナンド・ペソア（ポルトガル）

この観点から見ると、運とは才能と機会の組み合わせに過ぎないという考えは、視点の逆転を表している。運命はもはや無関係で予測不可能な存在ではなく、客観的な状況と個人の資質の産物となるのだ。

才能と機会：不可欠な組み合わせ

セネカの言葉は、成功を達成するための 2 つの重要な要素、つまり才能と機会を強調している。

才能とは生まれ持った潜在能力と培われた潜在能力

セネカによれば、才能とは単なる天賦の才ではなく、実践と磨きによって初めて効果を発揮する技能である。特定の活動に対する生来の素質だけでは不十分であり、それを完璧にするには絶え間ない献身も必要である。セネカは多くの著作の中で、卓越性を成し遂げるための手段として、教育と計画的な準備の重要性を強調している。したがって、才能は、最高の輝きを放つためにはカットと研磨が必要な原石に例えることができる。

偶発的な変数としての機会

機会とは、才能を文脈の中に位置づける外的要因だ。それは特定の歴史的、経済的、あるいは社会的状況である場合もあるが、影響力のある人物との出会いや、適切な時に適切な場所にいることなども含まれる場合がある。

フェルナンド・ペソア（ポルトガル）

しかし、セネカが暗に強調しているように、機会だけでは十分ではない。必要な才能とスキルを備えた者だけが、機会を掴み、成功へと変えることができるのだ。

自分を信じなければ、幸運は力を持たない

才能と機会の融合は、行動と準備のダイナミックな組み合わせの結果と言えるだろう。歴史を形作った男女の業績に、その典型的な例が見られる。例えば、レオナルド・ダ・ヴィンチは並外れた才能の持ち主だった、芸術と科学が特に好まれた時代に生きていた。アルバート・アインシュタインは並外れた知性の持ち主だったが、彼の発見は物理学の疑問が革命的な答えを待ち望んでいた時代に行われた。

フェルナンド・ペソア（ポルトガル）

いずれにせよ、こうした人々の価値は、才能や直感だけでなく、適切なタイミングで機会を察知し、必要に迫られて美德とする能力にもある。

この教訓を現代の日常生活に当てはめるということは、成功は単なる幸運の産物ではなく、ましてや生まれ持った才能だけに帰結するものではないことを認識することを意味する。むしろ、成功は準備と適応のダイナミックなバランスの賜物なのだ。セネカが示唆するように、一人ひとりが自らを磨き、スキルを磨き、機会が訪れた時にそれを掴む心構えを保つことで、自らの運命を変える力を持っているのだ。

競争と不確実性が際立つ今日の世界において、この格言は特に貴重だ。急速な技術、社会、文化の変化には、絶え間ない準備と、好機を見極めて掴む能力が求められる。

フェルナンド・ペソア（ポルトガル）

「運」を運命の受動的な恩恵と捉える考え方は、ますます受け入れられなくなっている。チャンスは必ずしも明確に現れるとは限らず、それを見抜き、活かすには努力が必要なのだ。

セネカは才能と機会の関係性についての洞察を通して、個人の責任と成功の本質について深い考察を促す。幸運の恩恵をただ待つのではなく、一人ひとりが備え、常に警戒を怠らず、状況が許す時に行動できるよう備えておくことが求められる。

ストア哲学と現実の両方において有効なこの教訓は、時代を超えて俺たちの心に刻まれています。運命とは、俺たちの献身と、好ましい状況を活用する能力の結果なのだ。セネカ自身が言ったように、「行き先を知らない船乗りには、順風は吹かない」のである。これは、才能を機

会に変え、機会を勝利に変えたいと願う人々にとって、不可欠な教訓だ。

セスト・パルス（ルーマニア）

セスト・パルス（ルーマニア）

もし僕が幸せだったら、何も書かないだろう。
悲しい者が書き、幸せな者が読む

ルツィ、きみはもっと動きやすい粒子だと知っている。風に運ばれる塵の粒子の中で、きみは一番軽い。だからこそ風はきみを遠くまで運んでくれるんだ。風が吹くとき、きみにはつかまるための草の葉が必要なんだ…ルツィ、海に話しかけて、風に話しかけて…

内側に逃げ出すほどねじれた家を建てたため、
そのため僕は[…]悲しげに皮膚がボロボロにな
って外に出るのが非常に困難なのだ。

セスト・パルス（ルーマニア）

ついに、待ちに待った、そして予期せぬメレが
僕の近所に現れた。それは星について、天の川
から来た宇宙詩人についてだ。きみはテレ・メ
レを通して彼を未知なる世界から連れ出し、天
文地図に載せたのだ。

この金床をリズムカルに叩くハンマーはどこに
ある？

光は深淵から震え

真実は光から深淵へと揺れ動く

僕たちは常に背後に存在し

他者を右に、左に据える

セスト・パルス（ルーマニア）

しかし、僕たちの前には何もない
僕たちの完全な鏡、僕たちの背後にいる者の鏡
（？）

光の牢獄に閉じ込められた僕たちは、
どうやって物事を見ることができるのだろう？
僕たちは地球の棚に本のように座っている。
それぞれが独自の言語で書かれ、
翻訳不可能で、理解不能で、
他の惑星から来たものだ。
それでも、僕たちには独自の声があり、それは
僕たちの共通の運命の声なのだ。

セスト・パルス（ルーマニア）

今年はトランペットとともに過ぎ去り、誰もが
イレーザーできれいに拭かれた黒板を見ている...

今年はなんと順調に進んでいるのだろう、なんと
順調に、坂を下りていくのだろう

敵は僕を吸い込み、僕を苦しめ
巨大なスプーンからすすりながら...

ここに僕はいる、忘却の鳥
ここに僕は雲の中に住んでいる

中略

飛ぶために…僕は忘却の鳥
僕自身から逃げ出したい…遥か彼方に
僕の中に火葬場が灯されている

セスト・パルス（ルーマニア）

彼は静寂を変えようとした
が、静寂が彼を閉じ込めた。
彼は海を静めようとした
が、波が彼を打ち負かした。

そして、死についての詩を通して
ハワイの男がどのように成長し、
その頂上が遠くに見えるかを感じてくれ
それは目に書かれ、言葉で語られる

詩歌が
日の出と日の入りに響き渡る
晩秋の空に
笛を吹く鶉（ウ）が立ち上がる

セスト・パルス (ルーマニア)

「周りのすべてが白く、白いものはすべて空虚だ。そして僕の心の中では、僕の心にあることを書かないようにしよう。それは白黒だ」。

Check out Pals, Sesto – YIVO Encyclopedia on YIVO Encyclopedias:

<https://encyclopedia.yivo.org/api/share/article/2385>

(1913-2002) 詩人。セスト・パルス（本名シミオン・シェストパリ）はオデッサ

☆

カラスは

黒いコートに燕尾服を着て散歩に出かける。カラスの鳴き声が大きくなれば、周りの鳥たちは静まり返る。カラスは枝に腰掛けて

演奏会を指揮し始める

が、静寂が彼を飲み込み、

砂漠へと導く。

カラスは彫像のように立ち、

貧弱なアンサンブルを見つめ、

そこにはないピアノを見つめ、

沈黙する葉を見つめる。

燕尾服は

鋼鉄の鎧のように彼の首を絞めるようだ。

「これはただの冗談だ」

オーケストラは彼の中にのみ存在する。

そして彼が突然気づく時、

セスト・パルス（ルーマニア）

すべてが空虚で、自分だけが満たされている時、
矢のような鳴き声が
彼を運命へと突き落とす。

☆

僕は行く、行く、そして夏の火葬の上で笑う、
頭上では霜がひっかく、
そして僕は空とともに梯子を登る、
まるで自分の鉄の柱の上で泣いているようだ。
しかし狂犬病が群れを壊し、
死者が風に吠えるとき、
きみはまだその痕跡がわかるだろうか、
逃げる途中で残されたものは言葉か？
僕は笑いに行く、きみも一緒に笑ってくれる
か？

聖者の火葬の上で泣く僕！

だから、だから、僕をひっくり返して、見知らぬ人よ、
そして風に見えない糸を引っ張ってくれ。

☆

困難な時に、ランプだけが僕のそばにいて、
場所を教え、風に運ばれてきた考えを教えてくれた、何百ものため息のように、

草の中の小さな花が地面からどのように芽吹くかを教えてくれる。

そしてそれらが消えると、ほうきがそれらをかすめ、夢は体の血を流し、再び死に、

そして再び生まれ、その中にあるものはすべて絡まり、壊れる。

そして僕は自分の糸がねじれるのを見、
僕は操り人形で、それが引っ張られるのを見る

セスト・パルス（ルーマニア）

そして僕はこのように、ぼんやりと歩いている
のを感じ、あるいは一人でぶら下がっているの
を感じる。

もう少し引っ張ればまた動き出し、
もう少し笑えば、糸が引っ張られるのが見える、
下り坂、また上り坂、
僕はゲームから抜け出す、これが僕の最後の一
歩だ。

☆

真実の機械は沈没し、
海は理性となり、海
に浸る世界は問いとなり、
自らへと回帰し、新たな何かをもたらす。
非科学の科学。

夜は売るのも
買うのも簡単、
特別な場所へ行く必要もない、
数時間分の料金を払えば夜はやってくる。
誰がきみに考えさせるの？
きみはどこかにいるの？
それとも、きみの中に流れる水が
この考え？
自分で答えられるのか？
それとも、答えはすでに与えられているのかも
しれない。
でも、きみには読めない。
与えられた言語は外国語だ。
書かれた文字もきみにはわからない。
そのインクは奇妙だ。
それはきみの血だ。
書かれた文字はきみの脳だ。

セスト・パルス (ルーマニア)

答えはきみ自身だ。

そして、きみ自身以上にきみにとって異質なものはない。

☆

きみは静かに微笑むことができる
今日も明日も誰もが優しく微笑む
世界は意見を合わせて笑う
この通りを歩くのは良い
ちょうど今どこかで鐘が鳴った
ちょうど今白馬が出発した
今日の通りは単調で寒い
今日の通り...

セスト・パルス (ルーマニア)

きみは僕に先に進むように言った
世界は僕の閉じたドアをノックしに来た
そして僕は自分自身を閉じ込めた もう
僕のところに来ないで
きみにはここに用はない 僕
は一人ぼっちで、

きみを惨めさから救い出してあげられる
きみはいつでも鍋を沸騰させておくことができる

セスト・パルス (ルーマニア)

周りのすべてを捨て去ることができる
僕は一人で孤独だ 僕は自分の歳を蝕んでいる。
今日僕は飢え、今日は弱い
きみはすべてに文句を言うことができる、僕は
残ったと。
今日と明日僕は笑う。－
そして僕は別のドアと掛け金を取り付ける －
きみは外にいることができる。
僕は 死ぬまできみの中には入れない

☆

世界が語る
数々の物語、あり得ない物語に耳を傾けていた。
しかし、もし世界がそれらを語るなら、それ自
体が物語を可能にする。

セスト・パルス（ルーマニア）

なぜなら、不可能は言葉にできず、言葉にできず、伝えることもできないからだ。この空虚な道が 魂と生命で満たされることは できるのだろうか？ この日、この 騒乱の海が静まることはできるのだろうか？きみの涙が 花に変わり、その花が笑顔に変わる ことはできるのだろうか？ この瞳が僕を見ることはできるのだろうか？できるのだろうか？



セスト・パルス（ルーマニア）

シャベルが僕の祈りを歌い、
鎖がそれにキスをする時、
僕は悪党を悪党の顔で見つめ、僕の石板の上で
獣、殺人者が死ぬだろう。
風はポケットに手を突っ込んで簡潔に歌い、
冷えた空のドレスはざわめき、
すべての涙は屋根裏の紐にかかって垂れ下がる
だろう。

袖をまくり上げ、小道は森の中をゆったりと伸びるだろう。

昼も夜も祈りをささやく森。

庭ではすべての犬がおとなしくしているだろう。

すべての狼は獲物を忘れるだろう。

通りでは雪が通行人の足を奪うだろう…

僕が土のトーガに身を包み、

強い鎖を体に巻き付ける時、

すべての虫が僕に謁見しに来るだろう。

すべての虫が大地の王のもとに来るだろう。

僕はそれぞれの訴えに耳を傾け、

そしてさまざまな個所でひび割れるだろう。

セスト・パルス（ルーマニア）

そして、ミミズは肉の割れ目に潜み、
アブラハムの懐のように、僕の中で転がり回る
だろう。

そして誰かがやって来たら、僕を獣と呼んで、
病院の唾壺のように僕の墓に唾を吐いてくれる
ように頼むだろう。

地面に撒き散らされた唾で他の人が感染しない
ようにするためだ。

説教壇は司祭を懇願するだろうが、誰もいない
だろう…

セスト・パルス（ルーマニア）

僕の口の中には水たまりができるだろう。最も臭い化学者の研究室のように、硫化水素の水たまりだ。

そして、オオカミたちは通り過ぎて人間のよう
に笑い、豚たちは皆、ぼろ布で鼻をふさぎ、
僕は腐った骨のような黄色い笑い声となり、世
俗的な腐敗の臭いを放つだろう。

それは、カラスやフクロウが避けるように、臭
い歯を死滅させた腐敗だ。

そして、オオカミたちは森の中で笑い、木々か
ら葉を引きちぎり、木々を寒さで凍らせるだろ
う。

獣にしてはあまりにもボロボロだったから。

セスト・パルス（ルーマニア）

交響楽団とジャズオーケストラを結成するためだけに… お願いだから、獣が死んだなんて言わないでくれ、石碑から「獣」という言葉を消さないでくれ。豚が死んだと真実を言った方がいいよ。だって、

☆

だから、今、自分自身と仲直りさせてくれ。
世界は目のように飛び去り、目は一日のように飛び去った。一日は過ぎ去ったのだ。

僕は友人として来て、敵として去った。
一人の人が通り過ぎ、さらに二人が簡単に、もっと簡単に通り過ぎるだろう。

きみはどこにいるのだ？

僕はきみた汚くて醜いと云った。

僕の喉に刺さったナイフが傷を作った。

僕の胸は丸い石になった。

また一人の人が通り過ぎる。

セスト・パルス（ルーマニア）

月は深い狂気の中にいて、
空に一人残っていた。
僕は月をずっと背中に歩いてきたが、理解する
のが遅すぎた。
空は汚れていて、月はらい病のようで、星は化
膿した腫れ物だということを。僕には何も残っ
ていない。僕はこのように一人で歩いている。

☆

朽ち果て、今にも倒れそうなフェンス。

誰も泣かず、
誰も笑わない庭。誰も通らない
通りの向こうに。同じ虚空の中で、僕らは何も
聞こえなかった。誰もいない、何もない端で。
そうやって僕らの魂は 同じフェンスで結ばれ
ていたのだ…

セスト・パルス (ルーマニア)

☆OC, 二十歳

なぜ血の鍾乳石が滴るのか？

単純な A がきみの誕生、単一の Z が終わりだ。
きみは少し笑うかもしれないし、たくさん笑う
かもしれない。

それでも、魂の足の裏に一本の棒が刺さると、
魂は自らを踏みつける。

だからこそ魂なのだ。もしそれが依然としてす
べてであるなら、それはきみにとっても、きみ
たちのものにとっても、きみたちのものにとっ
ても同じことだ。

クズ野郎

このクズ野郎！

☆Sesto Pals, Avant-garde Poetry and Other
Poems, 1930-1955、Tracus Arte Publishing

House、ブカレスト、2015 年、27 ページ。

ポルノ

雲は月の下に横たわり、

月は雲の上に横たわった。「一緒に 天国の寝室へ行こう」 僕たちは盛大な結婚式を挙げる。星だけ、風だけ 。月よ、きみは僕の妻になる。地上の旅路で 、小さな星たちと 僕たちは「天国のように」過ごす。 もう謎はなくなる。

★

「アルガイスト」の友人たちは、戦間期、そしてその一部は戦後も第二波シュルレアリスム（ゲラシム・ルカ、D・トロスト、パウル・パウ）の潮流の中で詩作とジャーナリズムの活動が続けていた MF

☆

そして、僕が他に言うべきことは何もない。ただ、この夜
剣を抜いた狂王が
山々を丘に
一本の木を狼に変えたのだ



グループの孤独 - FAMILIA Culture Magazine
<https://share.google/hJPXA50UckUXx1Tkx>



セスト・パルス

夢の論理が支配的であり、しばしばシュルレアリストの論理と交差する修辞法：フクロウやコウモリ、あるいは夜空を飛ぶ他の鳥ではないにもかかわらず、僕はきみをまるで僕の過去の一瞬、僕の記憶のように見ている。

もしかしたら、言葉の糸で織りなされた狂気の衣をまとい、きみは夜をさまよい、街の隅で泣き叫んでいるのかもしれない。あるいは、古い鐘楼で鐘の狂気が起こるのを待っているのかもしれない。

僕は自分自身の中に降り立ち、自分の外側から、僕の中で何が起きているのかを見つめようとする…僕は科学を行おうとはしない。なぜなら、今はありのままの僕自身、つまり理性とそれに対応する感覚を欠いた動物、獣としての僕自身を探求したいからだ。